

2017年度 本州太平洋におけるサケ回帰状況 (第1報：11月20日現在)

国立研究開発法人水産研究・教育機構
東北区水産研究所 沿岸漁業資源研究センター

本州太平洋側のサケ来遊数は、11月20日までに最終的な来遊数の約半数に到達することから、第1報（中間報告）として11月20日現在の状況をお知らせします。
なお、1月末までの最終的な来遊の状況は、第2報として2月中旬頃にお知らせする予定です。

1. サケ来遊概況

11月20日現在の本州太平洋側（竜飛岬から東の青森県～茨城県）におけるサケ来遊数（沿岸漁獲数と河川捕獲数の合計）の累計値は266万尾（前年同期：97%）と前年並みとなっているものの、平年同期（1989～2016年の平均値、741万尾）との比較では36%という状況であり、1989年以降で最も少なかった前年とほぼ同様の水準となっています（図1）。

河川捕獲数の累計値は31万尾（前年同期：102%）と前年並み、平年同期（64万尾）との比較では48%となっています。

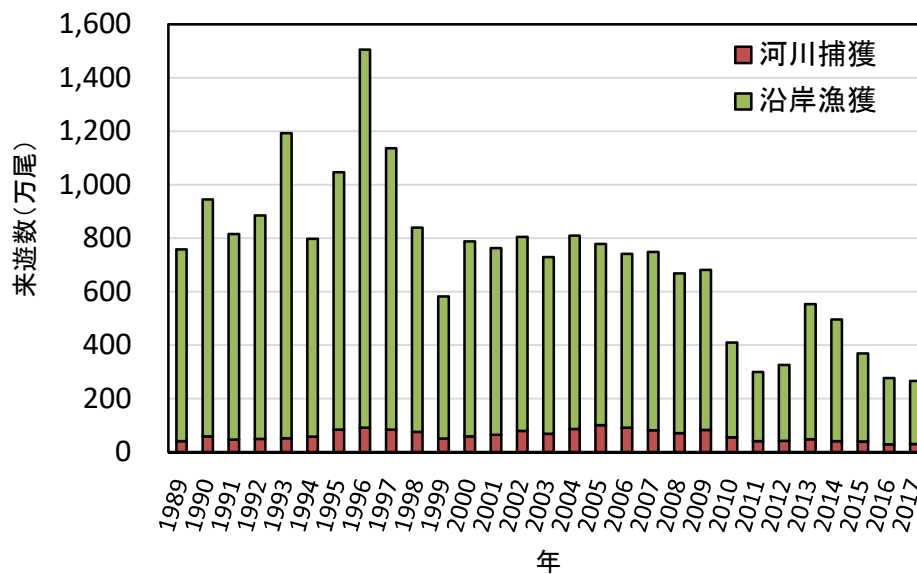


図1 11月20日時点の本州太平洋側におけるサケ来遊数（累計値）の経年変化

2. 年齢別来遊数

11月20日までに本州太平洋側の主要11河川（後述）に遡上したサケ親魚の年齢組成情報を基に年齢別の来遊数を推定し、過去10年間で比較しました。

主力を構成する3年魚、4年魚、5年魚はそれぞれ前年比301%、103%、50%となっており、3年魚で前年を上回りますが、4年魚で前年並み、5年魚で前年を下回っています。過去10年間では3年魚は2番目に多い一方、4年魚は2番目、5年魚は最も少なくなっており（2011年と同水準）、減少が顕著です（図2）。

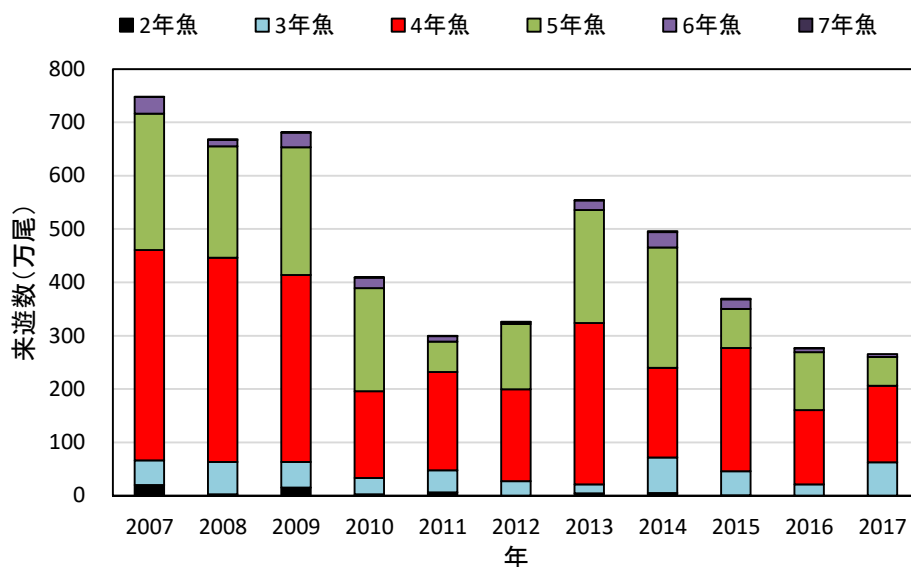


図2 11月20日時点の本州太平洋側におけるサケ年齢別来遊数（累計値）の経年変化

3. 年齢別河川捕獲数

本州太平洋側における主要河川のうち、11月20日現在、年齢が判明している川内川、奥入瀬川※、新井田川、安家川、田老川、津軽石川※、織笠川※、片岸川※、盛川、気仙沼大川、北上川の11河川（図3左）について、年齢別の河川捕獲数を年間の累積数でまとめました。

※: 奥入瀬川は青森県産業技術センター、津軽石川、織笠川、片岸川は岩手県水産技術センターのデータ

青森県では、いずれの調査河川においても4年魚の捕獲数が少なくなっています。一方、3年魚は川内川では過去10年間で最も多く、奥入瀬川では2番目に多くなっています。捕獲数全体としては、奥入瀬川では過去の変動の範囲内となっていますが、川内川は2番目、新井田川では最も少なくなっています。ただし、新井田川については、捕獲がピークとなる10月下旬の台風による増水の影響で、捕獲が行えない状況が長く続いたことも捕獲数減少の一要因と考えられます（図3右）。

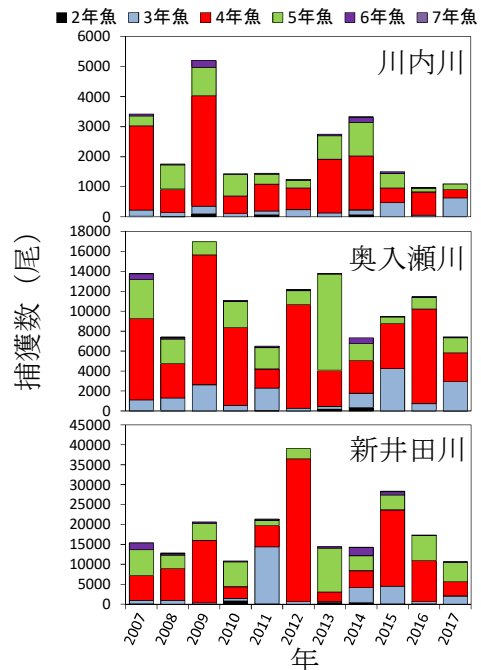


図3 年齢調査河川（左）と年齢別の河川捕獲数（右）（青森県：11月20日現在までの累計値）。

岩手県では、安家川を除く調査河川で4年魚を中心に捕獲数が顕著に少なくなっており、過去10年間では、片岸川が2番目、その他はいずれも最も少ない状況です。一方、安家川では3年魚は過去10年間で最も多く、全体としては過去の平均的な水準となっており、多くの河川で捕獲数が低迷する中、比較的好調を維持しています。（図4）。

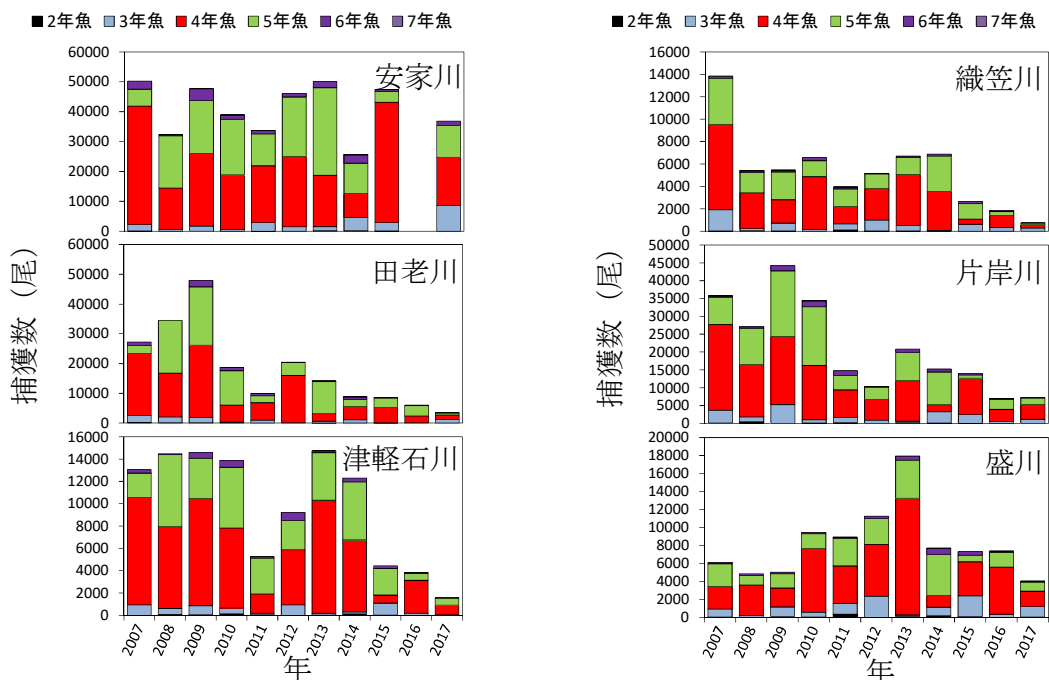


図4 年齢別の河川捕獲数（岩手県：11月20日現在までの累計値）。

宮城県の気仙沼大川では、捕獲数は過去 10 年間で最も少なくなっています。一方、北上川では、過去の平均を上回っています。4 年魚では、気仙沼大川では 3 番目に少ない一方、北上川では 3 番目に多く、対称的な状況となっています。北上川では 3 年魚が過去 10 年間で最も多くなっています（図 5）。

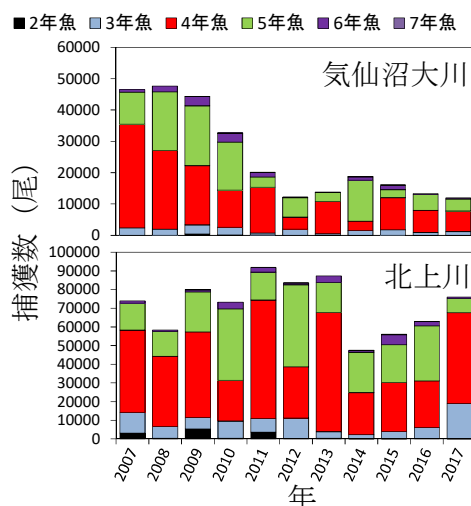


図 5 年齢別の河川捕獲数（宮城県：11 月 20 日現在までの累計値）。

11 月 20 日現在の太平洋各調査河川においては、岩手県を中心に 4 年魚の顕著な減少により捕獲数が著しく減少しています。本年の 4 年魚（2013 年生まれ群）については、東日本大震災の影響により、放流数が震災前より少ない河川がある一方、ふ化場が復旧し、震災前と同じ放流数になったにもかかわらず、捕獲数が低迷している河川もあります。このことから、4 年魚の減少には、放流数が少なかったことに加え、海洋環境等の他の要因も関与している可能性が考えられます。